

【原文】

大地震津なみ心え之記

嘉永七年六月十四日夜八つ時下り大地震ゆり出し翌十五日まで三十二度ゆりそれより小地震日としてゆらさることなし

廿五日頃漸ゆりやミ人心もおたやかになりし二同年十一月四日晴天四つ時大地震凡半時はかり瓦落柱ねちれ

たる家も多し川口よた来たることおひたゝしかりしかとも其日もことなく暮て翌五日昼七つ時きのふ

よりつよき地震にて未申のかた海鳴こと三四度見るうち海のおもて山のことくもりあかり

津波といふやいな高波うちあけ北川南川原へ大木大石をさかまき家蔵船みちん二碎き高波おし

来たる勢ひすさましくおそろしなんといはんかたなしこれより先地震をのかれんため浜へ逃あるひ八舟にのり又八北川南川筋へ

逃たる人のあやうきめにあひ溺死の人もすくなからす有に百五十年前宝永四年の地震にも浜辺へにけて

津波に死せし人のあまた有しとなん聞つたふ人もまれくになり行ものなれハこの碑を建置ものそかし又昔

よりつたへいふ井戸の水のへりあるひハにこれハ津波有へき印なりといへれとこの折には井の水のへりもにこりもせさりし

さすれハ井水の増減によらすこの後万一大地震ゆることあらハ火用心をいたし津波もよせ来へしと心えかならす浜辺

川筋へ逃ゆかす深専寺門前を東へ通り天神山へ立のくへし

恵空一庵書